

9.29 文学部総討論集会に参加せよ！

我々は9.29和泉地区に於ける文学部総討論集会で何が主張に語られるべきか、学園斗争一明大斗争の否定的側面を踏まえる内からその基本的課題を提出してみたい。
確実に情況は急である。

我々は現在風明屋英斗(ML派、中核派)諸君の学園斗争を10月-11月安保、沖縄“決戦”へ見る論調理によて、明大風雲バリケードの皆化をどの様な運動を媒介にしつゝより“权力”に接近しうるかを不向にしたまま「断固反」学友を結集して9月30日の日大一回国学園斗争による日大奪還斗争との「原理心中」によって現実的に終焉せしめようとしている。

それはこの間の明大斗争を回国学園斗争と10~11月の政治斗争の内ご明確に位置付けてみるとなく個別斗争と中央权力斗争を区別しない、個別斗争を中央权力斗争に流れ込んで行くと言う安易な運動に他ならない。

我々はこの様な安易な運動論調から、これらの論調者が“学園斗争→階級斗争を“決意”的問題にあり得ること”、“死守”“決戦”などといつて“セイエーショナリズム”的立場で語ることなく、かつ運動を展開することなく強く批判しないでないからこそそれが党派の物神性を押し付ける“革命主義者達”には断固として自己批判を要求するだらうことを明らかにしておきたい。

その場面

我々もこの間6.21からとの様な運動を展開して来たのが自らの勇さを乗り越えるために提出していくことしよう。

“生みの実存”→学園斗争の後退局面

我々はこの間、学園斗争、特に東大一明大斗争の切開いた地子とは何か”とをこの間に登場して来た。それは“個別学園斗争の枠を突破すること”によて国家権力との対峙を実現せしめた。それが“現象的には’69.1.18.19に表れた安田解放署の徹底抗戦行方”と。しかし我々は次の様な争も表れて来たし、それも一般化している。いわく“学園斗争→明大斗争は現実的に後退局面にある”と。国家権力→行動隊との直接的対決→武斗を繰り返すものが現実的に明大斗争の後退局面を現出している事も矢張り113といふ事で我々に次の事を要請している。

我々は“学園斗争の枠を突破する”が“国家権力→行動隊との直接的対決=武斗”であるといふ事を一面的なシーカーとして見ると絶対に出来ないと言うことがある。これを一面的なシーカーとして見ると“武斗”が革命主義者の様に“徹底抗戦”のための堅苦しい戦を刷出せず、などと叫びふことには、これはある。

我々は国家権力の實が大学にどの様な支配構造を基盤しつつ潜伏しているかを再度深く検討する必要がある。教育秩序を単に“自己否定”とか“科学の眞”とかに押し込めてしまう傾向を我々は卒直に自己批判的に統括して置かねばならない。我々はこの様な言葉の統括によつては“自己否定”など出来はないのである。さればハツカとした“权力”を想起したり、又その裏返しにすき“行

い運動隊のみを权力として指定し運動の固体を“武斗”に押し止めようならぬのである。
現実の教育秩序が制度的に何によて運営され 村能じいのかを、その代わり的側面
に於て相即じいの実を留保しつつ把握しなければならない。

学生運動は日韓～イタム反戦斗争を通じる内にあこ思想的には現実を肯定的に了解しつづ
所の諸要求貴徴一政争から少く脱皮していく。たゞそれが運動型態にあこは、”生の
度内”を賜ける“武斗”へと変換にゆく。“生の度内”はその度を頭著に示してゐる。それは
この内の中の生の度内がりゆかる実力斗争とこ展開したことを考へれば明かである。同時に意識の
面に於ても“戦後民主化”に死を！”とか“自己尊重”“自己否定”“生の度内”etc.に表れる様に
50年代の“平和と民主主義を守れ！”とは完全に位相を異にしている。それは自らの存在を即ち的
に把え運動を行なう事から対応→自らの存在を構造的に把握しう様にならざると云ふ事と
て表現出来るのである。しかしながら前述した様に、その運動とてとの一面化、抽象化を否定的側
面とて提出せよを得ないのである。すなはち意識の面に於ては徹底的に自化を通じて教育秩序を
制度的代行者としての相即に於て全的方に把握する内から“政治の権理”を踏まえつて運動
を展開に行かなくてはならない。

旧教育秩序が本質的には（政府ブルジョアジー－國協放大學－教授層－教官－学生の間）
というサイクルで保たれていた事を確認した上で、我々は制度上の絶対性を把握、すなはち、学校を科
制、試験制度、學位制度等を大學設置基準法、教育法などの肉體の中から把握し、それを
ブルジョア代行者の再生產→労働力商品再生產過程とて把えなくてはならぬいし、我々が“この様
な把握と運動を展開出来得ない”ために既に現実的行程斗争－明大斗争の後退局面に向かふと
してたのでは無いであるか。その意味に於て我々は政治党派の政治方針にシルを感ひて来た
つゝもやうシル・サイバーごじかはったし、それは自らを個体化したよだれ争に加わる事などあり
現実的な課題である70年安保、沖縄斗争を主体的“にほとうこう”青見えないものとてあつたと云
ふことである。我々は以上の様な視覚を踏まえ 9.29文部省総討議集団に於てなくとも次の東と
討論の主軸としなくてはならない。

あじたの国生斗そのの旧教育秩序一近代行代行者の把握の内から6項目要求の直致止場
を先取り新たな攻撃の環を設定せよ！

その(1)革命主導者どもの無差別中路線を批判し明大斗争の展望を許せば
運動の内輪模倣者せよ！

その(2)評議会運動の内実を階級の統一戦線とて肯定し权力斗争の
命題に内道せよ！

その(4)文部省基編一和泉地区再編を先取り！

ともにギリギリの意味を学び半う根柢を深めり一度とて開放する 9.29文部省総討議集団行委員会

9.29和泉5番教室 PM2:00～